被災地間の対話

生活支援相談員とインターローカルな知見

○川野健治・白神敬介

(独) 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所 自殺予防総合対策センター)

キーワード：東日本大震災，対話，インターローカル

A Study on the dialogue between the affected areas

Kenji Kawano, Keisuke Shiraga

(Center for Suicide prevention, National Institute of Mental Health, NCNP)

Key Words: The Great East Japan Earthquake, dialogue, inter-local

目 的

東日本大震災の被災地では、緊急雇用事業等によって現地採用され、仮設住宅への訪問による被災者の生活支援を担う「生活支援相談員」が活動を続けている。本研究では、この制度が初めて被災地支援に採用された新潟県中越地震時の生活支援相談員との対話の場を設定し、支援とするとともに、そこで見出される知見を記述することを目的とする。

生活支援相談員の日々の活動の中には、今後起こりうる被災の現場に向けて「受け渡し、引き継ぐべき経験」が含まれている可能性があるが、それは日常的に意識されるものではない。かつて同じ「生活支援相談員（以後 LSA）」という名称の下の活動に従事し、おそらく具体的には異なる経験をもつ新潟中越地震時の LSA との対話は、協調とズレを含み得る「構造的ディスコミュニケーション」（山本・高木, 2011）であり、両者の生活支援についての相互説明・理解のプロセスは、より創発的で可能性に富むと期待される。

そこで報告者らは、研究者による聞き取り調査ではなく、地域と協働して、新潟県の元 LSA の 3 名を岩手県釜石・大槌町地域に招いて対話の機会を提供し、被災地の生活支援について要点を抽出する作業に取り組んだ。その記録を作成することは、異なる時間と空間の被災地間でのインターローカルティ（矢守, 2009）を探索する試みであると考えられた。

方 法

この対話の機会は、「しえん者こん大槌 2012」と名付けられた。

【参加者】新潟からは、中越地震以降、新潟県にて生活支援相談員事業に関連した、LSA や県行政職員、社会福祉協議会職員、研究者の 4 名。岩手県大槌町からは、LSA のほか、地域支援相談員、町社会福祉協議会、大槌町の保健師、被災者支援室の職員など、併せて 40 数名が参加した。報告者のうち 1 名と被災者支援室の職員 1 名が、会の進行をつとめた。

【プログラム】大きく 3 つの部分で構成した。1) 新潟県旧山古志村の取り組みの紹介、2) 4 つの班にわかれての小集団討議、コーヒープレイクを挟んで、班員を入れ替えてもう一度小集団討議を行った。各班に司会と記録役をつくり、討議の内容は終了後に全体で共有した。3) 最後に、対話の内容を基にした、かるたづくりにとりくんだ。

活動の全体像はビデオカメラで撮影した。小集団討議は各班に IC レコーダを置き、対話の内容は後に文章に起こした。

結 果

両地域の支援者の対話は、多様な気づきを生んだ。たとえば、以下の対話の中では、復興プロセスの見立てがなされた。ここでは、報告者らが準備した、新潟中越地震以降の被災者生活支援活動の「年表」が、対話のツールになっている。

-仮設住民の退去についての対話-

新潟 1：当然。多分、市の復興部局が何度も何度も足重ねて、

足運んで説得したと思いますよ。だって、言っちゃ悪いけど、最後の仮設を、仮設を全部やめる時だってそうでしょ。

大槌 1：神戸もそうでしたよね。

新潟 1：神戸、5 年強くらいかかっているのかな。あれ、7 年で、平成 12 年の 3 月だったっけ？ うちも 3 年ぐらいかかっているんですよ。

大槌 3：でも、仮設住宅ができて、3 年でもう仮設住宅はなくなったんですか？

（中略）

大槌 4：だから、うちらここで、逆算していくと、ここらうろうろしているよねっていう感じで。

大槌 5：まだまだですよ、全然。

大槌 4：まだまだ。

大槌 2：全廃がここですもんね。

新潟 1：全廃。うん。最後の人、引っ越しとかするのに、みんなこう裏で、生活支援相談員がお手伝いしたりして。9 月末・・・

大槌 2：約 3 年か。

新潟 1：約 3 年ですね。旧長岡が 9 月末になくなって、旧山古志が 12 月末で、その年の末か。12 月末。で、皆、山に戻ってきて、3 年。

大槌 1：やっぱり、建てる場所があるのは違うんですよ。

新潟 1：強いですよ。

大槌 2：全然違うよね。やっぱりね。

新潟 1：でも、地震のあとに、「これ、何年もあるんだろうな」と思ったけど、よく 3 年で出したなと思って、俺。行政も大変だったなと思うんですね。今から考えれば、あの時は見えなかったけど、今から考えれば、いい要素がみんな重なった。さっき言ったように、建てる土地がまずあったと（笑）。偶然だったんですよ。

考 察

先の例では、年表を通して新潟の復興過程が参照され、大槌のプロセスを重ね合わせることで、「まだまだ」といった見立てが生まれている。また、別の対話では、初期のボランティアの受け入れに対して、「社会福祉協議会」に関係する現地の支援者としてのアイデンティティを相互確認しながら、評価を共有していた。このように、鍵となるいくつかの概念を見出しながら、両者の対話は気づきへとつながっていた。その中で特に、「阪神・神戸」の情報が、事例として参照されることも少なくなかった。インターローカルな知見の共有の方法と内容について、さらに検討していきたい。

引用文献

山本登志哉・高木光太郎 (2011) ディスコミュニケーションの心理学 東京大学出版会／矢守克也 (2009) 『書簡体論文』の可能性と課題 質的心理学研究, 8, 64-74.

* 本研究は、日本心理学会「第 2 回東日本大震災からの復興のための実践活動及び研究助成」を受けて実施された